

詩篇4篇1-8節 「ゆとりを与える主」

1A 苦しみの時 1-5

1B 義なる神 1

2B 虚しいものへの愛 2

3B 聖徒への特別な扱い 3

4B 静まる 4-5

2A 主の御顔 6-8

1B 何か良い目 6

2B 心の喜び 7

3B 安眠 8

アウトライン

詩篇第4篇を見ていきます。私たちはヨブ記が終わり、詩篇を読んでいます。ヨブ記において、私たちは神の義について、苦しみの中で悩んでいるヨブの言葉を読んできました。詩篇においては、主にダビデが自分の苦しみの中における悩みを読んでいます。詩篇においては、ダビデはその嘆きを主に打ち明けて、それから感謝と賛美に変わっていく姿を見ていきます。私たちはぜひ、この長い詩篇の中で、祈りと賛美、そして御言葉の思い巡らし、つまりデポジションの生活が、これからの学びによって盛んになっていくことを願い、祈り求めます。

第三篇と、第四篇は、敵に囲まれている中でもゆっくりと休むことのできる信仰告白をしている歌であります。いきなりですが、「いかにぐっすりと眠ることができるか？」という説教の題名を付けても良いような内容であります。私たちの生活で、とてつもないストレスがあり、それで精神的に、心理的に圧迫を受けているこの社会において、圧迫があろうとも安眠のできるような余裕は喉から手が出るほどほしいことでしょう。信仰によって、その秘訣を今朝、手に入れていただければと思います。

1A 苦しみの時 1-5

1B 義なる神 1

まず題名を読みます。「4 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデの賛歌」ダビデほど、ストレスの多い信仰者はいなかったと思います。彼は勇士でありましたが、自分の主君サウルから追われる身となりました。つぎに、彼が王となってから息子アブシャロムによってクーデターを起こされて、エルサレムを出ていくのを余儀なくされました。しかし、彼はそのような生活の大変なところを通っている中で、その情熱はいつも神への賛美にありました。何かをしているのではなく、神を眺め、神をあがめたいと願っていたのです。

そして、祈りに答えてくださるよう願っています。「1 私が呼ぶとき、答えてください。私の義なる神。あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。私をあわれみ、私の祈りを聞いてください。」

彼は、自分の神を「義なる神」と呼んでいます。ここが彼の心にゆとりを与える第一歩の信仰告白でした。義なる神とは、自分を義としてくださる神のことです。「すべての人は罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。(ローマ 3:23-24)」ヨブが苦しみの中にある時に、ヨブのように自分の義について主張しなければいけなかったのは、友人三人があなたは何か隠している罪を犯しているからだ、としていたからです。しかし今、ダビデは苦しみの中にあつて自分の神は、恵みによって自分を義と認めておられるという余裕がありました。苦しんでいるからといって、神が自分に悪くしているとか、自分の罪を重箱のように突いているとは思わなかったのです。良い意味で、図々しく神は自分の味方であると思っていたのです。「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。(ローマ 8:31)」

主が味方になっておられるということを知るだけで、私たちは余裕が出ます。その結果、「ゆとり」があるのですが、どうでしょうかゆとりのある心を持ちたいとは思いませんか？広い心です。このゆとりは、周りの出来事に一定の距離、境界線が置かれていることを意味します。悩む時は、私たちにその境界線がありません。悩ませるものが自分の身にまわりついて、それで心を狭くしているのです。しかし、主がすべてのことを支配しておられて、悪をも掌握しておられることを知るならば、私たちの心にゆとりが生まれるのです。

2B 虚しいものへの愛 2

2 人の子たちよ。いつまでわたしの栄光をはずかしめ、むなしいものを愛し、まやかしものを慕い求めるのか。セラ

苦しみの中にある時に、私たちには誘惑がやってきます。それは、虚しいものを愛して、まやかしものを慕い求める誘惑です。その辛さを和らげるために、お酒に走る人もいることでしょう。その他の罪の生活に戻ることにもなりかねません。心の圧迫に対して、一時的な、悪い意味での休養を入れようとする誘惑に対して、ダビデはそれを拒否しています。

3B 聖徒への特別な扱い 3

それで彼は自分に言い聞かせます。「3 知れ。主は、ご自分の聖徒を特別に扱われるのだ。私が呼ぶとき、主は聞いてくださる。」主が、自分を義と認めてくださるだけでなく、聖徒を特別に扱ってくださいます。

いかがでしょうか、私たちは時々、真面目になってしまって、全ての人がえこひいきなく平等に取

り扱われていると思っていないでしょうか？もちろん、主は人をえこひいきされるような方ではありません。しかし、神は人を選ばれる時に、その人にある良さや正しさによって選ばれるのではなく、もっぱらご自分が愛したいと思われて、慕わしいと思われて選ばれたのです。神はイスラエルに対して、こう言われました。「あなたは、あなたの神、主の聖なる民だからである。あなたの神、主は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。主があなたがたを恋い慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。しかし、主があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、主は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。(申命記 7:6-8)」

私はいつも大阪弁を使って話します。「教会はしょぼくていいのだ。」しょぼい、というのは格好良くないということです。みすぼらしい、ぱっとしないというような意味です。どこか抜けている、問題がある、どうもまとまっていない、と思うのですが、いいえ、神はそのような尺度で私たちを選ばれているのではないのです。イスラエルを聖なる民としてこよなく愛された方です。そして、しょぼい十二弟子たちを選ばれて、長い時間かけて付き合われたイエス様です。大いなる憐れみによって特別に扱ってくださっているのです。ですから、この小さき者の祈りも聞いてくださいます。

使徒ヨハネは、「雷の子」と呼ばれた弟子でした。イエス様を受け入れなかったサマリヤ人が気に入らなかったので、「ルカ 9:54 主よ。私たちが天から火を呼び下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」と言った人間です。おいおい、大丈夫かよ？と思いますが、このヨハネは自分のことを「イエスが愛しておられた者(13:23)」と自著のヨハネの福音書では書いています。他の誰よりもイエスが自分を愛しておられたのだ、という自負です。しかし、イエス様はそのような伝染するような、錯覚を与えるような愛を持っておられました。百二十の愛があるとして、十二弟子に平等に十ずつの愛を分け与えられたのではなく、十二弟子それぞれが百二十の愛を受けていると思っていました。これが愛の力です。

4B 静まる 4-5

4 恐れおののけ。そして罪を犯すな。床の上で自分の心に語り、静まれ。セラ 5 義のいけにえをささげ、主に投げ頼め。

再び、ダビデは自分を戒めています。一方的な神の好意を受けているのだから、恐れおののいて、罪を犯してはいけなしいと言っています。そして大事なものは、「床の上で自分の心に語り、静まれ。」であります。いろいろな思いが頭をよぎっています。しかし、神の慈しみを思って心に語って、静まらせなさいと言っています。

心を静かにさせることが、いかに大切でしょうか？私たちは午後の学びで詩篇第一篇から見て

いきますが、私たちの正しさは、主の御言葉を思い巡らし、口ずさむところにあるのだ、ということです。静かにしているところに、主が語りかけてくださいます。私たちの周りはずっと騒ぎに満ちています。詩篇第二篇は、「なぜ国々は騒ぎ立ち、国民はむなしくつぶやくのか。」という言葉から始まります。つぶやき、ツイッターがありますね。ニュースもそうですし、人々は騒いでつぶやいています。それらの言葉に私たちが反応するのではなく、神が上から見て笑っておられると、二篇 4 節に書いてあります。神が王となっておられるのです。したがって、それらの騒ぎに心を乱されてはなりません。

そしてダビデは、「義のいけにえをささげ、主に拠り頼め。」と言っていますが、これは改めて、主が自分を、ご自分の恵みによって正しいと認めておられるということを知って、それで主に拠り頼みなさいと言っているところです。そして次の御言葉を思い出します。「マタイ 6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」私たちが苦しみの時に、第一にすべきことを第二、第三にしてしまう誘惑があります。主を恐れて、心を静め、そして主がなされていることに心を留め、それに身を任せるのです。

2A 主の御顔 6-8

1B 何か良い目 6

ダビデはさらに、この世から聞こえてくる声を退けています。「6 多くの者は言っています。「だれかわれわれに良い目を見せてくれないものか。」主よ。どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください。」何か良いことをしてくれないのか、という声です。これは安らぎのある心、ゆとりのある心とは反対の、安らぎのない心、落ち着かない心、眠れない心を示しています。

使徒パウロはテモテに、「満ち足りた心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。(1テモテ 6:6)」と言いました。しかし私たち人間は、何かをしなければいけない、何かをしていないと落ち着かない、満ち足りるためには、これこれのことをしなければいけないという思いを持っています。ただ主の中で満ち足りていることを忘れてしまいます。それは、主のためではなく自分のために生きようとしているからです。自分のために生きようとするとき、もっと何かが必要だと思い、いろいろなことをしてみるのです。それでも満たされない。

これは、主に見出されていない人の生き方ではありますが、苦しみの時に私たちはともすると、「何かをすることによって、この苦しみから免れることができるのではないか。」という誘惑を受けます。焦りから行うことは、大きな損失を招きます。

そこで再びダビデは、主のすばらしさを求めています。「主の御顔の光を、照らしてください」と祈っています。これは、主が私たちに好意を寄せてくださっている笑顔を投げかけるような行為です。「どうか、神が私たちをあわれみ、祝福し、み顔を私たちの上に照り輝かしてくださいように。(67:1)」すばらしいですね、私たちは神の御顔を仰ぎ見ようとする時に、怖い顔を思いますか？

「お前はかわいくないから、顔を背ける。」と思っているのでしょうか？いいえ、父なる神は、悔い改めた、あの放蕩息子のように、どんなに汚くても、やってきてそのまま抱き付いて、口づけを何度もしてくださるような方です。

祭司アロンが、民を祝福するための祈りを捧げました。祝祷としばしば呼びますが、民数記 6 章 24-26 節にあります。「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。」第一に、神が祝福されると、私たちは守られます。祝福が私たちの守りになります。悪い者からの守りです。「あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に(ユダ 24 節)」

そして、主が御顔を照らされると、恵まれます。神が一方向的に好意を寄せておられるのが、恵みです。ですから間違っってはならぬは、自分がどれだけ主に捧げたのかによって、祝福が決まるのではないのです。神が祝福したいから、そのご性質から祝福されるのであり、私たちの務めはそれを信じることです。さらに、主が御顔を向けられると、平安が与えられます。恵みが与えられると、平安が与えられます。神がキリストにあって私たちを和解してくださったので、私たちは神と平和を持っています。さらに、私たちが神に自分の思い患いをゆだねることによって、私たちの心を神の平安が守ってくれます。

2B 心の喜び 7

7 あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。

神との正しい関係に入ると、心に喜びが来ます。「箴言 10:28 正しい者の望みは喜びであり、悪者の期待は消えうせる。」喜びは、聖霊の実の特徴の一つです。パウロが、「いつも喜んでいなさい。(1テサロニケ 5:16)」と言いましたが、それは無理やり作り笑いをすることではなく、常に主の慈しみを仰ぎ見て、その正しい関係の中に留まる絶え間ない努力に基づいています。

ここで大事なものは、喜びが他の物質的な豊かさよりもまさっているということです。自分の持っているもので主にある喜びが左右されることはありません。もし左右されるのであれば、それは主の御顔が照らされていることにまだ目を向けていないからでしょう。

3B 安眠 8

そして一節でダビデが述べていたことを結論で述べています。「8 平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。」平安があるので、身を横たえることができます。眠りにつくことができます。安らかにしてくださるのは、状況が良くなるからではなく、主ご自身であります。義なる主、聖なる民として特別に扱われる主、そして

御顔を照らされる主であります。

最後に、このことを実践された人を紹介したいと思います。苦しみの中でもぐっすり寝てしまわれた方です。預言者ヨナと言わないでくださいね！彼は主に逆らって、ふてくされて、落ち込んで船底にぐっすり寝ていました。誰ですか？そうです、嵐の中でも眠られていたイエス様です。「ルカ 8:22-25 そのころのある日のこと、イエスは弟子たちといっしょに舟に乗り、「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう。」と言われた。それで弟子たちは舟を出した。舟で渡っている間にイエスはぐっすり眠ってしまわれた。ところが突風が湖に吹きおろして来たので、弟子たちは水をかぶって危険になった。そこで、彼らは近寄って行ってイエスを起こし、「先生、先生。私たちはおぼれて死にそうです。」と言った。イエスは、起き上がって、風と荒波とをしかりつけられた。すると風も波も治まり、なぎになった。イエスは彼らに、「あなたがたの信仰はどこにあるのです。」と言われた。弟子たちは驚き恐れて互いに言った。「風も水も、お命じになれば従うとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

イエス様は、義なる神に完全に抛り頼んでいました。そしてご自身は神の御子であられること、父なる神から愛されていることを知っておられました。このように恵みがイエス様にはあったので、嵐の中でも平安があり、ぐっすり眠ることができたのです。私たちはじつくりと、イエス様と同じように神の平安を得る訓練を得なければいけませんね。その訓練とは、私たちが急ぎ立てるこの世の声、サタンの声との戦いで、その声を聞かないという訓練です。虚しいことをしてしまう、罪を犯してしまうということのない、主の恵み深さに留まっている訓練です。何かをしなければいけないと駆り立てるところから、何もしなくても主が祝福してくださるということを知って、その中に留まっていることのできる訓練です。静けさの中に留まる訓練です。

「良い目を見せてくれないものか」何か良いことがないのか？

休みがない

過去に満足がない、冷笑が現在に、将来に悲観

金持ちも、貧しい人も

イエス様は、食べて飲む以上のものである

「御顔の光を」

神が良さを見つけられたのは、「光を造られた」というところにある。

神が七日目に休まれた

神の臨在がなくなって、罪を犯す

罪に拠って、安らぎがなくなった

ヨハネ4:34 贖いの業 「完了した」再び安息へ

「安らかに」

B. Jehovah make His face to shine upon thee.

1. This means literally that the image of His face is to shine through you.

a. "We with open face beholding the glory of the Lord. etc."

b. "Let the beauty of Jesus be seen in me."

2. "And be gracious unto you."

a. Grace is the unmerited favor of God. It is undeserved and uncaused in the recipient.

b. It is the basis of all God's blessings.

1. Lack of blessing never due to lack of devotion - or work - or witnessing - or prayer.

c. Ultimate manifestation of God's grace. "And the Word was made flesh. etc."

That one who came died for our sins the just for the

unjust. "God made Him to be sin for us" etc.

"He was rich, yet for our sins He became..." etc.

C. Jehovah lift up His countenance upon you.

1. May the brightness of His face light your path.

a. How glorious to walk in the light of His love.

2. "And give you peace."

a. First of all peace with God.

1. This was made possible through death of Jesus Christ.

2. "Having made peace through the blood of His covenant."

b. "The peace of God will keep your heart and mind through Jesus Christ our Lord."

c. "Peace I leave with you, my peace I give unto you" etc.